

貴志南っ子_{2月}

平成29年2月1日

「鬼は外・・・」

1年生全員が廊下に出て座り込んで何かをしていました。のぞいてみると、紙のお皿を使って鬼の面を作っているのです。2月3日は節分。節分とは季節の変わり目である立春、立夏、立秋、立冬の前日をいうのだそうですが、今は立春の前日だけを指すことが多いようです。

なんともユーモラスな子どもたちの鬼の面を見ながら、最近の電話会社のCMのおかげで昔話に興味を持っている子が多くなったと言っていた人がいたことを思い出していました。



鬼の話①

と同時に、5、6年前の「新聞広告クリエイティブコンテスト」の最優秀賞の作品を思い出しました。その作品は、「ぼくのおとうさんは、桃太郎というやつに殺されました。」という自筆(?)の文の下に、子どもの赤鬼が小さな金棒を持って立って泣いているイラストがありました。

泣いている子ども鬼の下には「一方的な『めでたし、めでたし』を生まないために 広げよう、あなたがみている世界」のコメントがありました。調べてみると、作者の山崎博司さんは『桃太郎』のお話は、桃太郎の視点で描かれているので、鬼の子どもにとって悲しい結末。ある人にとっての正義や幸せという価値観は、他の人の視点では全く違うかもしれない。それをこの作品で表現したかったのです。」とありました。

なるほどそうです。あたかも益虫、害虫という分類が人間にとっての利害の視点での分類であることに似ています。視点を変えて、見方を変えて、立場を変えてみることの大切さに気付かされます。



鬼の話②

私が子どもたちに紹介したい本の一つに「おにたのぼうし」があります。あまきみこさんの作品で、絵は岩崎ちひろさんです。

節分の夜、身を隠しながら、かわいそうな女の子のために尽くした「おにた」。最後の女の子の願いをかなえることで自分が消えてしまっても、豆を届け、豆まきをさせるのです。それでも女の子はそうのように自分の幸せを心底願ってくれ、消えてしまった「おにた」に気づきません。「おにだって、いろいろ あるのに・・・」という「おにた」の言葉に、偏見が知らず知らず他を傷つける怖さを感じとることができます。また、「おにたのぼうし」のタイトルと、最後消えてしまう「おにた」が「ぼうし」を残した意味は何なのだろうと考えさせられます。

有名な「ないた赤おに」は小学3年生ぐらいで「友情」を考えさせる道徳授業の教材によく使われます。これを中学生の道徳の授業で試み、非常に有効だったという実践があります。上記のような深い作品は、大きくなって読み直すと新たなことに気付きます。すぐれた作品には、自分の心の成長を自覚させてくれる力もあるのですね。
〈学校長〉

★貴志南小学校では、ホームページを設けています。<http://www9.wakayama-wky.ed.jp/kishiminami/>
※写真等は児童個人を特定できないように配慮しています。